者。一再相見、則未有不薰然而心醉焉、家又屢也。而處之恬然。未嘗覺其不足也。先丁妣孺人憂服朞。尋服考府君喪三年。著論孟古義十七卷。中庸發揮大學定本共一卷、語孟字義二卷、童子問三卷。文集三卷。詩集一卷。娶緒方氏。後娶瀨崎氏。五男三女。皆研家學。嫡長胤最明穎。善文。寛永丁卯七月廿日生、寶永乙酉三月十二日卒。年七十九。葬于小倉山先塋之次。私謚曰古學先生。嗚呼哀哉。銘曰。

先生高尚。不近名利。洙泗正統。本邦主盟。
無一時用。有千載榮。學耶德耶。日月雙明。

寶永三年丙戌春三月十二當小祥日

北村可昌謹撰

以下文字爲身ノ左傍ニ書

孝子長胤　建

唐六典云。碑碣之制。五品以上立碑。碣古曲路。碑古方路。上不過四尺。七品以下立碣。上不過九尺。若隱淪道素、孝義著聞。雖不仕亦立碣。本邦制多用唐禮。故今據六典。立碣四尺云。

一、梁田蜕巖の詩

弄笛胡姬自訴心。轉腔曲々入人深。受降城上淚如雨。吹入關山月色沈、

右胡婦吹笛圖

誰採荷花十里塘。吳姬慣水蕩輕槳。歸來欲問芋羅艷。怕有泥中白玉香。

右採蓮曲

從秋錫來登此堂。滿山寶氣媚春光。道衣映日雲煙紫。法會散花風雨香。饒舌不須飛玉屑。苦心聊欲食金剛。誰知老子戲三昧。別有詩家古錦囊。

右寄寶山鰲雲師

此生早晚脫官枷。每臥春窓爲一嗟。家學半參林寺衲。山資都付水樓花。數莖白髮晨彈鋏。兩腋清風夜喫茶。不厭從來多病苦。壯肥俗了幾烏紗。

右春日病中作

夢裡幻魂喚郎語。孤枕自鬱羞侍女。掩袂暗淚滋華衫。坐使春心作暮雨。日沈香霧飽半規。笛隔柳煙知何許。殘妝懶向玉鏡臺。背文寶月爲誰吐。

右美人睡起詞和袁石公韻

一、南部國華の詩

登吉祥閣

進步登高閣。迥然出翠烟。寸眸容八極。雙手捧三天。江入中橋水。海通兩國川。樓臺如並櫛。原野似敷筵。遠見心猶駭。下窺目欲眩。回頭望塞北。萬々白雲連。

南　國華

國華。氏南部。俗稱豐太郎。父宗齋。稱南山。富山儒醫。富山越中府。

此詩雄渾偉麗。唐之盛者也。因憶昔遊學于錦里之日。南海祇生年十三四。與同學共賦邊馬有歸思詩。天才超群。逸如千里之駒。我語之曰。駟哉。子必有以文章名于世。後來果如吾言。我今謂南氏之子亦然。若失有使吾言得之於前而失之於後。則不啻吾言之過。蓋有分其譏者也矣。遂書以爲之左券云。

寶永丁亥三月十二日白石在中甫識。

一、葛卷有禎松風亭の記

是歲暮春のころ、渭北の茅屋を辭して、いま江東の羈客となれり。爰に書窓の南面に古松あり。風いたればおのづから瑤琴のしらべをなし、しからざれば亭然として空に聳えり。予旦夕に愛翫やむことなし。殊に秋いにし後、群樹落葉の音たてゝ十里の風聲更にかすかも也。一宵師禮雅丈を招て、寒灯の下に盃酒をまうけ、しば〳〵清話を催して深更におよぶ。折しも松風枕上にかよひ、幽情地にうごき、ともに言の葉をわする。蓋こゝに初て松を賞するにしもあらず。予比年金陵において、蓽門ざせるわらやを求めてすめり。かしこにも松樹あり。よく閑暇をうれば雅丈に告て相對しかたるに、松風の感興ひとり秀たることをもはらにす。一日旅窓の松風落木の後、更にまたまぎるゝことなしとけいす。回鱗にいはく、松風をもて亭の名とせむはかなへりやと。予すなはち相諾して源雅明にもとめて、其土のもじを書かしめ壁上に掲ぐ。雅丈また其由を記して投贈せらる。其詞宛ら金玉の夢をなし、松の貞心殊の外にいちじるしく感氣にたへざる者なり。抑松は紅花清香の壯觀もなく、四時にうつる色もなし。おほよそ無事をもて其躰とし、しかも貞節のすくよかなることを添たり。且は蒼園靜なる斜陽の陰、蘿窓茅屋に月のいたる時、霜寒き曉鐘の程、其蕭疎たる琴歌ことさらに設けたるにあらず。幽情の感興言の葉に盡すべからず。至感こゝにとゞまれるものか。しかるに彼